

下諏訪町湖浄連の清掃活動の長期継続の理由についての考察

山村 美保里

学生会員 東京工業大学大学院 社会理工学研究科 博士課程 (〒152-0033 東京都目黒区大岡山 2-12-1, E-mail:yamamura.m.ac@m.titech.ac.jp)

地域の良い環境回復や維持のために活動を行っている市民主体の団体は全国に多数あるが、継続と世代交代は大きな課題になっている。本研究は、ゴミ拾い活動を37年に渡って続けている下諏訪町の団体に着目し、活動の長期継続を可能としている要因を分析した。その結果、固定した基礎的な清掃と啓発活動のほか、柔軟な対応、分担の工夫、他者との交流等であることが明らかになった。さらに奉仕と協力の精神、人づくりという見えにくい要素も重要な要因であり、御柱祭という諏訪地域独特の神事によって醸成されたそれらの特徴も寄与していることを考察した。

キーワード: 市民活動, 長期継続, ゴミ拾い, 御柱祭

1. はじめに

(1) 背景と目的

全国で水辺の環境改善や環境維持を目的とした数多くの市民団体が活動しており、全国川の日ワークショップ(以下川の日WS)では、活動内容の紹介や交流を行っている。規模や内容は様々であり、また活動に関する問題も多岐にわたるが、近年は経済的困難、人材不足、世代交代を課題として挙げる団体は多い。特に市民活動の継続については、発起した世代から次の世代へつなげることができるかどうかは大きな課題で、20年問題、20年の壁等と呼ばれている。

川の日WSの参加団体はこれまで延べ約1000件あるが、その中で最も活動歴の長い団体は、下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会(以下湖浄連)である。湖浄連は、月に一度の諏訪湖沿岸のゴミ拾いという小さな活動を37年間続けており、それは筆者が活動に参加した際に参加者から聞いた「子どもの頃にゴミを拾っていた世代が、成人した後に自分の子供を連れて参加している」という長さである。湖浄連が運営する世代を交替しても継続している理由を明らかにすることは、個別事例の持つ特性を鑑みても今後の市民活動継続へ示唆を与えるものと考えられる。

そこで本研究では、下諏訪町の美化活動団体の湖浄連を対象として、活動の開始の背景、活動内容とその経緯等を分析することにより、長期継続の要因を抽出し考察

することを目的とする。

(2) 研究の位置づけ

市民参加に関する研究は多いが、その中で活動の継続に着目した研究には、伊藤らの継続活動の要因を分析した研究¹⁾、羽鳥らの市民活動の持続に関して心理的要因から分析した研究²⁾などがある。伊藤らは、既往研究から継続の要因を導き、活動の時期による特徴をモデル化して具体事例によってその要因の妥当性を検討している。羽鳥らは、活動の継続に関して地域密着と文化資本を軸とした仮説をたて、アンケート調査によって仮説を検証している。しかしこれらは一般的な傾向は示しているものの、事例の継続年数は10年未満であり、世代交代を配慮した継続要因には触れていない。

諏訪湖の環境や治水を対象とした研究には、井上らの諏訪湖沿岸への漂着ゴミを採集し分析した研究³⁾、久保田らの湖水面積の減少と浸水被害との関係から地域住民の自主的な治水への働きかけに着目した考察⁴⁾、日比野の諏訪湖の環境と水質を分析した研究⁵⁾がある。しかし、市民主体の団体やそれらによる環境づくりへ着目した研究は見られない。

以上より、本研究は、市民主体の団体である湖浄連の活動を、活動内容と地域の特性に着目し、世代交代して継続している要因を提示することに新規性がある。

(3) 研究の方法

本研究は、筆者がゴミ拾い活動に参加して、活動の様子を観察し、また代表らにヒアリングを行った。調査日は2015年3月14日の日曜日、ゴミ拾いの時間は朝8:00集合～9:00頃である。ヒアリングは、ゴミ拾い活動終了後下諏訪町庁舎内会議室において、湖浄連総合研究部会代表の小口智徳氏に行った。

その他では、湖浄連作成の冊子類と川の日誌の発表資料、下諏訪町の各種政策の計画書、信濃新聞の記事等を資料として用いた。

2. 地域の概要

(1) 下諏訪町

諏訪地域には、諏訪郡の下諏訪町、富士見町、原村と諏訪市、茅野市、岡谷市の三市二町一村があり、そのうち諏訪市、岡谷市、下諏訪町の三市町が諏訪湖岸に接している。下諏訪町は、北部は三峰山で小県郡と、西は岡谷市に、東に諏訪市に接し、諏訪湖に南面している。町内を流れる河川は、砥川、東俣川、承知川等で諏訪湖に注いでいる。町域の80%は山林で、諏訪湖に面して扇状地が広がり、集落の大半は南部の平野部に集中している。

下諏訪町は、農林水産業のか、戦前は製糸業、戦後は精密機械工業と観光業が主な産業となっている。諏訪には諏訪大社四社があり多くの参拝者を集めているが、特に寅申年に行われる御柱祭は全国的に有名である。下諏

訪町には、四社のうち春宮秋宮の下社二社が鎮座しており、御柱祭では山間の棚木場から柱を運び、木落とし、注連掛け、大社境内での建御柱が行われる。図-1の★はこれら祭りの主要な場所である。旧石器時代の遺跡も産出し、また冬季の諏訪湖の御神渡りや温泉の湧出に関する神話も語り継がれている。

旧中山道と甲州街道が下諏訪町の秋宮の付近で合流しており、古くから交通の要衝であった。さらに下諏訪は中山道唯一の温泉宿場町であったため江戸期より賑わい、現在も温泉旅館が軒を並べている。下諏訪町の人口は20,061人、世帯数7,933世帯（2016年10月現在）で、人口は1971年、世帯数は1999年をピークにゆるやかに減少している。

(2) 諏訪湖

諏訪湖は標高759m、外周15.9km、湖面積13.3km²の長野県最大の湖である。流入河川は31本、流出河川は天竜川1本であり、また深度は最大7.2m、平均4.7mの比較的浅い湖であるため、山に多量の降雨があると洪水が起きやすく、沿岸では古来より水害に悩まされてきている。近年の大きな水害は1961年、1983年、2006年に起こっており、それぞれ元号によって36水害、58水害、平成18年7月水害と呼ばれている。治水施設は、昭和初期に天竜川流入口に釜口水門が設置され、さらに1988年に新釜口水門が完成して大容量の放流の調整が可能になった。沿岸には1967年からコンクリート製の波返し護岸が築造され1978年に完成した。

諏訪湖は水深が浅く水の滞留期間が39日もあるため、水が汚染されると湖全体に影響しやすい。高度成長期を経た1960年代には沿岸の工場及び家庭の排水の流入により湖の水質が悪化した。波返し護岸ではゴミが打ち上げられることがないため、湖にゴミが浮遊している状態も続いた。アオコの発生により湖の水は緑色になり、まるでペンキを流したようだと評された。

水質改善のため、まず湖底の泥浚渫が1969年より始まり、さらに1970年に沿岸三市町の公共下水道が計画され、下諏訪町では下水道の使用が1979年開始した。流域の下水道の普及は1987年に50%、1995年に75%に及び、現在ほぼ100%に達している。諏訪湖の水質は徐々に改善され、平成18年には窒素やCODなど主要な汚染物質の減少の目標は達成された。しかし環境基準値までには未だ到達していないことが課題である⁵⁾。またコンクリート波返し護岸ではゴミの湖面での浮遊が続き、水の浄化も行われないという実質的な環境への負荷に加え、景観上も好ましくないという批判が起こった。1990年の多自然型川づくり実施要領を基に、人口なごさを回復することを盛り込んだ「諏訪湖水辺の整備マスタープラン」⁶⁾が1994



図-1 下諏訪町と諏訪湖 国土地理院発行 1/50,000 より転載

年に計画され、翌年より自然護岸への工事が開始された。現在では復活した生物の営巣が復活するなど、環境の改善が報告されている⁷⁾。

また長野県諏訪建設事務所は2002年に、湖周を1区間約500mの32区間に分けて64の団体が美化活動をする「諏訪湖アダプトプログラム」を開始した。団体は、諏訪湖流域の6市町村に住む、住民、企業、学校などで、年3回以上の清掃活動をするようになっており、事業者は用具の貸し出しや報奨金などで活動を支援している。下諏訪町では、7区間14団体が参加している。

3. 湖浄連の活動

(1) 活動の概況

湖浄連は1980年9月1日に、旧下諏訪青年会議所の呼びかけで、「諏訪湖にトンボを」をスローガンに、下諏訪町の40組織等の連合体で設立された⁸⁾。参加団体及び組織には、青年会議所、下諏訪町衛生自治会連合、下諏訪町婦人連合会、小中学校PTAのほか、下諏訪町在所の企業などで、2015年現在は参加団体数72、個人会員10名である。設立当時の諏訪湖は汚濁水とゴミの浮遊という環境だった。設立前のトンボ調査で、コンクリート護岸を登ることができず羽化できないヤゴの数の多さから「諏訪湖にトンボを」がスローガンになったという。

活動内容は月に一度、下諏訪町エリアの湖岸のゴミを拾って歩く清掃が最も基本的なもので、春秋に沿岸三市町各々が主催する一斉清掃、花火大会後の清掃への参加も含め、通年で計画を立てて実行している(図-2)。その他には、清掃と環境をテーマとした湖浄連主催のクリーン祭の運営開催、環境意識啓発のための講演会開催、図書館への図書の寄贈等を継続的に行っている。近年では、ブラックバスやブルーギル、アレチウリ等の外来生物の除去が大きな課題である。クリーン祭では、環境に関連したブースが出され、ゲームやスタンプラリーなど楽しみながら環境について学び考える機会となっている。

清掃の担当は、図-2に示すように月ごとに分担が分かれている。春秋の一斉清掃の4、10月と、クリーン祭およびの花火大会実行委員会主催の花火大会後の一斉清掃は基本的に全員参加で、12～4月の冬期を中心とした期間は、ゴミも少なく降雪があると拾うゴミが見えず清掃が中止になるなどもあり、特に分担を決めずに活動可能な団体が行っている。その他の6、7、9、11月の月ごとの担当と、町主催の一斉清掃時のエリアごとの担当は、下諏訪町内の1～10の日常生活上における基本的な単位の行政区によって分けている。

さらに、長野県によるアダプト制度に参加している団

きれいな諏訪湖を
とりもどそう



平成26年度最優秀作品 下諏訪中学校 2年 工藤未愛璃さん
《夏休みに小中学生を対象にポスターを募集しています》

湖岸清掃に参加しましょう

実施日	清掃時間	担当団体	清掃区域	集合場所・時刻
4月26日(日)	7:00~8:00	各種団体	みずべ公園 船庫	みずべ公園 6:45
環境の日一斉清掃 ※別途お知らせします				
5月24日(日)	7:00~8:00	各種団体	アレチウリ除去第1回	博物館駐車場 6:45
6月14日(日)	7:00~8:00	5区 各種団体 4区・10区 各種団体	博物館 諏訪市場 アレチウリ除去第2回 ブラックバス稚魚駆除	博物館駐車場 6:45
7月12日(日)	7:00~8:00	1区 各種団体 7区・8区 各種団体	博物館 諏訪市場 アレチウリ除去第3回	博物館駐車場 6:45
7月26日(日)	7:00~8:00	各種団体 自主参加	アレチウリ除去第4回	高浜公園トイレ前 6:45
8月9日(日)		第34回諏訪湖クリーン祭 ※別途お知らせします		
8月16日(日)	7:00~8:00	花火大会後清掃参加協力	みずべ公園 諏訪市場 市役所 市役所	みずべ公園 6:45
9月6日(日)	7:00~8:00	各種団体	みずべ公園 船庫	みずべ公園 6:45
10月18日(日)		秋季一斉清掃 ※別途お知らせします		
11月8日(日)	7:00~8:00	2区 各種団体 6区・9区 各種団体	船庫 前岡谷市場 ブルーギル稚魚駆除	船庫 前 6:45
12月13日(日)	8:00~9:00	各種団体	船庫 前岡谷市場	船庫 前 7:45
1月17日(日)	8:00~9:00	各種団体	みずべ公園 船庫	みずべ公園 7:45
2月14日(日)	8:00~9:00	各種団体	みずべ公園 船庫	みずべ公園 7:45
3月13日(日)	8:00~9:00	各種団体	みずべ公園 船庫	みずべ公園 7:45

※雨天、積雪等による中止の場合はAM6:30に、12月から3月はAM7:00に広報無線によりお知らせします。
※中止等の連絡は下諏訪町メール配信サービスでもお知らせします。ぜひご登録ください。
○ご協力は用意してあります。軍手、ゴム手袋、長靴などは各自で用意をお願いします。○湖岸清掃時は、道路への車はしないでください。
○集合場所への行き順にも道路のごみ拾いをお願いします。○月1回の湖岸清掃に合わせて、身近な清掃もします。
○お問い合わせは、湖浄連事務局まで。下諏訪町住民生活課生活環境係 西27-1111(内線142) FAX226-9936
Eメール: kankyo@town.shimosuwa.lg.jp 湖浄連ホームページhttp://www.kajurene.jp 天竜川治水会館http://kenryugawa.gr.jp
【道後県立図書館情報】http://www.his.go.jp 下諏訪町メール配信サービスhttp://shimosuwa.mai-rp.jp

下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会・美しい環境づくり諏訪地域推進会議
オノウエ印刷は諏訪湖浄化運動に協力しています！

図-2 湖浄連の年間清掃計画チラシ

体の多くは、湖浄連の清掃日に合わせて活動することが多い。

湖浄連は、会規約に則り、会長以下数人の役員を選出し、年間の活動や予算執行等の計画報告を総会で行って運営されている。予算は一団体3000円の会費の徴収のほか、下諏訪町からの補助金、美しい環境づくりの助成金、河川愛護団体の報奨金がある。事務所は役場内にある。

(2) 設立からこれまでの活動の変化

表-1に示すように、湖浄連は1980年に設立されて以降、様々な出来事があったが、毎月の清掃活動は設立時から今日まで続き、参加人数を計測開始した1990年以降確認できている年間延べ参加者数は、増減はあるものの平均で3500人程度になっている。啓発活動は、設立翌年の1981年にクリーン祭を、3年後の1983年に講習会を開催しこれらも今日まで継続している。このように毎月の清掃と環境啓発活動を基本的な活動としていることは一貫している。

さらに、設立当時は全国的に環境破壊と市民運動が活発になっていた時期であった。設立直後から様々な取材や表彰を受けたり、外部から視察に訪れるなど、他者及び他団体からの影響が続いている。

1990年代はじめには、下水道の普及と浚渫効果によって、水質が向上し、自然護岸への計画も立てられ、環境の改善が具体的にみられる時期となり、湖浄連も組織を

見直しつつ、シンポジウムへの参加及び開催等の外部への発信も行うなど、様々な行事に取り組んでいる。2010年以降になると、主な活動は清掃と啓発活動を中心にした基本的なものに戻り、川の日WSやその他の催しを通じて知己となった全国の団体との交流を行いながら小規模に確実に活動を継続しているといえる。

4. 湖浄連の活動継続の要因の分析

本章では、湖浄連が世代を超えて継続してきた要因を、既往知見からの検証、活動歴の詳細な検証を行い、さらに一般化されていない要因を各種資料から分析抽出する。

(1) 既往知見による継続要因の有無

伊藤らの研究では、既往知見から継続活動に起因する要因を抽出し、事例での検証を行っている¹⁾。本節では、それらを湖浄連に参照して継続の要因を検討する。

第1は「人：参加者とのつながり」のキーマンの存在、多様な参加者の存在、組織内外につながりのある参加者である。湖浄連は設立当初は意識の高いキーマンは存在していたが、世代交代を経て次第に組織全体が緩やかに負担する活動に定着してきたといえる。会員には様々な団体が名を連ね、全国の市民団体と交流を持ち、刺激を受けながら活動を継続しているといえる。

第2は「意識：目標と信頼関係」で、共通の目標や方針、強い意識、参加者相互の信頼関係である。設立時には汚染の激しかった諏訪湖であるが、徐々に改善され、それに伴って湖浄連の活動の存続如何を何度も話し合っている。参加者相互の信頼関係は、後に述べる諏訪地域の特徴から非常に強いものがある。

第3は「環境：適正な合意形成」で、意見や情報の共有、意識変容に通じる外的な刺激、行政や企業の支援である。意識変容は第1の要因と共通である。湖浄連では総会等の正式な合意形成の場のみならず、日頃の付き合いも深く、意見や情報の共有は充分できているといえる。また1993年の湖浄連の会長を務めた青木氏は現町長であり、湖浄連の活動に理解を示し、資金及び労力の提供等で支援している。その他青年会議所等の他の組織と人事は常に循環しており、適正な合意形成の環境は整っているといえる。

以上より、湖浄連の活動は、伊藤らの分析による継続の要因に概ね該当するものの、設立当初にはあったキーマンの存在、強い意識が、途中から希薄になってきおり、現在では該当しているとはいえない。

(2) 湖浄連の活動時期による特徴の分析

伊藤らは、活動の時間的継続について、活動の萌芽期、活性期、発展期を示し、事例検証を行っているが、いずれも10年に満たない継続期間である。本節では、これらの分類を参考にしつつ、湖浄連の活動継続の時間的特徴を、設立から7年後まで、8～13年後、14～20年後、21～28年後、29～現在までの5期に分けて検証する。

設立から7年間（1980～1986年）は、諏訪湖の環境悪化を目の当たりに強い意識と青年会議所のリーダーシップによって活動が開始され、清掃と啓発の二つの骨格が形成された時期である。一方、設立間もないにも関わらず市民活動として注目されNHKの取材や表彰も多く受けている。この期間は活動の骨格形成と新規性へ注目を受けた時期である。

設立8～13年までの6年間（1987～1992）は、10周年を挟み、活動が徐々に広がっていった時期である。町民レガッタへのトン汁サービス、種々のシンポジウムへの参加など、湖浄連から他者への積極的な関与の姿勢がみられる。外部からは取材や表彰のほか、平成2年の福井県武生・鯖江地区の広域市町村圏協議会をはじめ、全国の水辺復活の活動をしている団体が下諏訪の湖常連の活動の視察に訪れている。この時期は、発信の強化と他地域とのつながりが始まった時期といえる。

設立後14～20年の7年間（1993～1999年）は、下水道施設の普及により湖の水質が改善され、コンクリート護岸から人工なぎさへ戻す工事が始まるなど、行政による諏

表-1 湖浄連の主な活動内容の経緯

西暦	元号	主な出来事	外部からの視察・取材・表彰	清掃参加者数	クリーン祭実施	講演会開催	ポスター
1980	昭和55	湖浄連設立		—	○		
1981	56	第1回クリーン祭開催	NHK取材「環境を考える」	—	○		
1982	57			—	○	○	
1983	58		下諏訪町明るいづくり運動表彰	—	○	○	
1984	59		長野県治水同盟表彰	—	○	○	
1985	60		日本河川協会表彰	—	○		
1986	61	町民レガッタトン汁サービス（～H18）		—	○		
1987	62		水郷・水都全国会議出席	—	○		
1988	63		県知事感謝状	—	○	○	
1989	平1	10周年プロジェクト	環境庁水質保全局長表彰	—	○	○	
1990	2		NHK取材 水の汚染を考える 福井県武生・鯖江地区視察	2045	○	○	
1991	3		環境庁長官表彰 三重県阿児町、茨城県土浦市、 福井県三方町視察	2280	○	○	
1992	4		牛久沼流域水質浄化協	3010	○	○	
1993	5	湖浄連のこれからを考える 委員会 琵琶湖へ研修視察		3310	○		
1994	6	総合研究部会発足	県美しい環境づくり推進表彰	4880	○	○	
1995	7	総合研究部会 諏訪湖浄化	あきふ処理対策協会環境美化ボラ	6160	○	○	
1996	8			3830	○	○	
1997	9	よみがえれ諏訪湖ビデオ製作		3870	○	○	
1998	10	図書館への寄託	長野県知事環境保全功労表彰	3270	○	○	
1999	11	諏訪まちづくり懇談会参加			○	○	
2000	12	諏訪湖で泳ごう 岡谷、諏訪クリーンフェス ティバル参加		3370	○	○	○
2001	13			3405	○	○	○
2002	14	びわ湖会議交流会 国際河川湖沼環境シンポ ジウム諏訪開催	地域づくり総務大臣賞受賞	3685	○	○	○
2003	15	ブラックバス駆除（～現在）		6250	○	○	○
2004	16	25周年		3928	○	○	○
2005	17	身近な水環境全国一斉調査（～現在）		2645	○	○	○
2006	18			1760	※	○	○
2007	19	天竜川ゆめ会議アレチウリ除去 住民意識調査「住民が望 む諏訪湖の景観」		3570	○	○	○
2008	20			2110	○	○	○
2009	21	いい川づくりWS参加（～現在）		1920	○	○	○
2010	22				○	○	○
2011	23			-	○	○	○
2012	24			-	○	○	○
2013	25			-	○	○	○
2014	26			2530	○	○	○
2015	27		荒川流域連絡会との勉強会	2170	○	○	○
2016	28			1975	○	○	○

訪湖の改善が具体化されてきた時期である。湖浄連では、「湖浄連のこれからを考える委員会」を立ち上げて、ゴミ拾い活動の意義の間直し、組織及び活動内容の見直しを行い、ホームページやビデオの作成などの多くの新しいことに取り組んでいる。この期間は新たな組織への模索と再編の時期といえる。

設立21～28年の8年間（2000～2007）は、諏訪湖の水質は比較的良好な状態で安定しており、自然護岸の工事も進行し、アドプト制度をはじめ湖岸清掃の体制も整い、設立当初に目標にしていた環境が整いつつある時期であり、また運営する世代も交替している。2000年に、湖岸清掃の運営を行う「浄化運動部会」、8月の恒例イベントを担当する「クリーン祭部会」、ポスターや図書、講演会によって環境への意識を醸成する「環境美化啓発部会」、今後の湖浄連の在り方や外来種問題への取り組みを行う「総合研究部会」の四部会制となり、この体制が今日まで続いている。またこの期間は「諏訪湖で泳ごう」などの地域イベントへの更なる参加、「国際河川湖沼環境シンポジウム」「諏訪湖ルネッサンス」開催など、発信する活動がより積極的になっている。一方、外来種の駆除など設立時にはなかった課題が発生し対応を始めている。この時期は、発展的改編の時期と考えられる。

設立後29年以降（2008～）は、基本的な四部会の活動が定着し、また子ども時代に湖浄連の清掃活動に参加した会員が、成人後自分の子どもを連れて参加を始めた時期である。2009年から川の日WSへ参加を始め、新しい交流と知見の授受を現在まで続けている。清掃と啓蒙と交流を軸に、民間主導でありながら町全体で行う活動として定着し、運営の世代交代のみならず、参加者が新世代に伝えるという新しい伝統が形成されている時期である。

以上のように、湖浄連は全体としては、清掃と啓蒙を軸に徐々に活動の種類が増えて活発化したが、目標であった環境改善にあわせて活動内容を見直し、また基本的な内容に帰着しつつ、他地域との交流によって新たな学びと刺激を得て活動を維持しているといえる。

注目すべきは、設立後20年を挟んだ二つの時期である。下水道と自然護岸回復の公共政策による水質向上と、一斉清掃という自治体主導の美化行事によって、当初の目標は概ね達成し、設立当初の強い意思が希薄になってきた時期であり、また設立発起人の世代が引退し次世代へ交代する時期である。活動が開始された頃と周囲の状況が変化し、組織の意義や参加者の意識も変わって来るこの時期をどのように乗り越えるのかが、継続に大きく関わっている。湖浄連では、根底に清掃と啓蒙という一貫した基礎的活動を継続しつつ、周囲の変化を鑑みて、組織の意義を正面から問い、様々な取り組みを行ってはやめるという柔軟な対応を、7年の模索と再編、8年の発

展的改編の計15年前後続けている。この時期の試行錯誤とその結果が、30年以降の小規模ながら安定した活動継続の礎となっていると考えられる。

(3)基本的活動の継続の理由

長期継続の要因は前節で検討したように、一貫した基礎的活動と柔軟な対応と考えられる。しかし、水質の浄化は下水道設備の普及と護岸のコンクリートから自然護岸への改築による効果が大きく、ゴミ清掃も重要な時期に諏訪湖一斉清掃が行われるため、湖浄連の活動の美化への効果はそれほど大きいとはいえない。実際筆者が清掃活動に参加した際には、一見したところではゴミが見えないほどきれいであり、清掃活動をした前後で景観が大きく変わるとは言えなかった。従って、清掃と啓蒙を続けた理由は、環境美化以外にあり、それを会員が共有していたことが継続に寄与していたと考えられる。本節では、種々の資料等における湖浄連の具体的な美化活動以外に関する文言から、継続の理由を検討する。

活動紹介のためのパンフレットには「ゴミを拾う人はゴミを捨てない」「ゴミを捨てにくい環境をつくる」とあり。また「拾っている姿を見せ続けること等の意識付けが未来の環境形成のために大切である（2009年会長滝脇篤氏）」⁸⁾とある。さらに「平成18年豪雨の際にクリーン祭を中止して豪雨被害の清掃を行ったことに関して、町民のみなさんに湖岸の清掃を呼び掛けてくださいました。集まってくださったみなさんの姿が今でも忘れられません。湖浄連の活動は一見すると地味なものかもしれませんが、長年続けてこられ活動は、着実に住民の心に根付いています（1993年会長現下諏訪町長青木悟氏）」⁸⁾は、水害という状況に応じてその時に最も必要なことへの協力をしている臨機応変さも評価されている。さらに「水との新たなつきあい方を皆さんと一緒に考えて行きたい」（湖浄連ホームページ：<http://www.kojouren.jp/>）、「湖畔は常にきれいで、地域の人たちにはゴミのない景色が当たり前になっている」（湖浄連小口氏）、「先人がゴミを拾う姿こそが最大の啓発活動となり、それを見て育った子供たちが現在の主力になっている」⁹⁾、「ゴミを拾う姿を見せ続けることが地域に向けた最大の啓発であり、その意識を植え付けることが諏訪湖を守ることに通じていく。『口』ではなく『行動』で語る啓発活動に意義がある」¹⁰⁾

以上の記述を検討すると、湖浄連の清掃活動は諏訪湖の物理的美化だけではなく、活動に参加してゴミを拾い、また拾っている姿を地域の人々に見せることで、ゴミを捨てない心、地域を大切にすることを育むことを目的としていることがわかる。その意義を下諏訪町の住民が認めているために、参加し協力を続けていると考えられる。

(4) 清掃活動の分担の工夫

3章1節で示したように、湖浄連の清掃活動は、三市町の一斉清掃や、県のアドプト制度とも組合せて、個々人の負担が少ないながら必要な個所を網羅するような工夫があり、分担の単位は下諏訪町内の行政区となっている。基本単位である区は、御柱祭をはじめ行事をとともにするために非常にまとまりがあるという。1～10区までの行政区の町名と人口及び御柱祭に曳行する柱を表-2に、行政区の位置を図-3に示す。

区によって人口規模の違いがある。最大の区は3区で、下諏訪町の中心部を占めており、下諏訪町における発言力は大きく、湖浄連の清掃活動でも夏場の清掃負担の大きい時期に単独で担当している。また山間部の重要な地点に所在する6区は、規模は小さくても下諏訪町における行事への意思決定への影響力は大きく、湖浄連設立時も湖から遠い6区の賛同を得たことが大きかったという。清掃では1970年代に開発された振興の住宅地地区の9区と組んでいる。このように地域特有の特徴を加味し配慮して分担を割り振る工夫をしている。

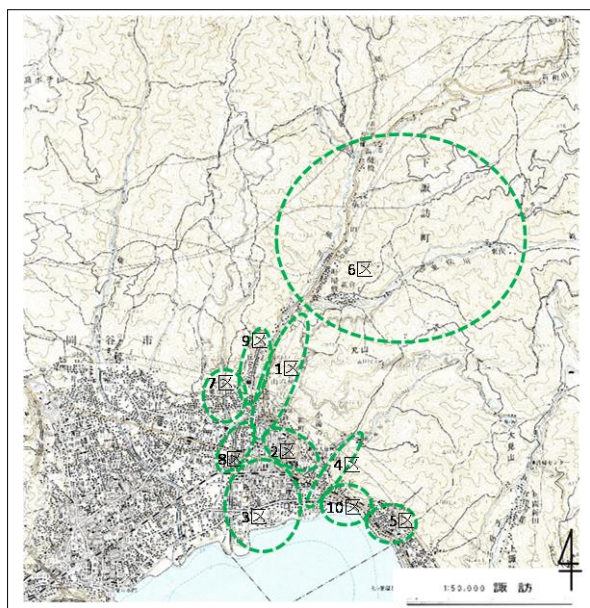


図-3 下諏訪町の行政区の所在

表-2 下諏訪町の行政区町名と人口

御柱の担当	行政区				
	区名	人口	町名		
山出し 里曳	1区	2821	東町	大門	田中
秋一 春三	2区	1173	立町	小湯の	横町木
秋一 秋三	3区	7822	大社通	友之町	広瀬
秋三 秋四	4区	1262	上久保	久保海	湖畔
秋三 秋四	5区	1278	東高木	西高木	南高木
秋三 春三	6区	846	荻倉	樋橋	東侯
秋一 春三	7区	1889	東山田(1～7)		
秋三 秋四	8区	1010	社東(第1～4)		
秋一 春三	9区	690	星が丘(第1～5)		
秋三 秋四	10区	1857	西豊	西浜	高浜

(5) 御柱祭

下諏訪町における行動の単位となって行政区は、御柱祭の活動とも密接な関係にある。御柱祭の正式名称は「式年造営御柱大祭」であり、寅申年の6年毎に社殿を建て替える神事である。本節では2016年に行われた御柱祭に関わる行事を参照しつつ、湖浄連の活動継続の要因を検討する。

表-3は、2016年御柱祭の信濃新聞の主要な関連神事等の一覧である。祭りの行事は、開催3年前の2013年5月には柱の仮見立てから始まり、実行委員が解散した2016年10月下旬まで続いている。6年間のうち3年半以上もの間、御柱関係の行事が行われている。

最も重要な大社の柱に関しては、2015年5月に東侯国有林で春宮秋宮二社の合計8本の柱の木が伐採されて、11月に棚木場に移される。本祭は、はじめに2016年4月8日から山出しで二日間後に注連掛に並べられ、5月14日から里曳きで宮にむかい、16日に宮に柱が建てられて終わる。柱の曳行と建御柱を担当する区は決まっており、下諏訪町は表-2の通りである。1月頃から担当の区ごとに御柱を曳くための綱打ちを行うが、御柱祭は死亡者も珍しくない荒々しい祭りであり、担当する仲間と心を一つにして真剣に取り組むという。

本祭終了後には、地域のすべての神社や祠等に柱を建てる小宮が秋まで行われる。小宮は、子どもが主役、観光客の曳行、企業が社内用地の祠に行くなど、様々な形態がある。

また 祭りは多くの人を結び付けている点がある。祭りの前年には、御柱曳行に歌われる木遣り歌や、里曳き

表-3 信濃新聞記載の御柱祭関連神事等

記事掲載日	実施日	記事内容
2013 5/13		下社御柱仮見立て
2014 5/29	28	下社御柱本見立て
	8/14 13	2016年の御柱祭日程発表
2015 2/12		下諏訪町御柱祭関連予算決定
	4/12	下諏訪町木遣り保存会小学校で木遣りを学ぶ教室
	4/27	四王町秋一元綱用稲わらの種まき
	5/12	12 下社の御柱用材伐採。巨木の幹に斧(よき)を入れる
	5/29	28 秋宮一が正式決定。巨木の前で祝いの木遣り
	10/9	御柱祭でのみ披露の「綱渡りの木遣り」練習開始
	10/11	10 御柱実行委員が下社山出し曳行路を確認
	10/22	20 東山田長持保存会が長持を担ぐ練習
	11/2	1 「御柱用材を育む会」日本産の食害を防ぐネット張
	11/27	26 下社御柱用材八本棚木場に勢ぞろい
	12/7	6 下社秋宮神楽殿大注連縄新調 50人
	1/18	17 下諏訪町秋宮で木遣り保存会で勢ぞろい式 70人
	2/11	10 諏訪信金の実行委発足(岡谷市)
	2/11	10 木遣り保存会、スーパーの依頼で木遣りを披露
	2/18	17 下社、山出し木遣りへの観客の流入を規制の方針決める
	2/27	25 御柱祭曳行委員会総会於下社秋宮参集殿 3区200人
	3/1	29 秋宮、奉献者が柱の先頭で持つ大御幣の授与式 40人
	3/31	30 下諏訪町御柱祭実行委員会山出し前の最後の総会
4/8～10 御柱祭 下社 山出し		
5/14～16 御柱祭 下社 里曳き		
	5/17	16 下社春宮秋宮建御柱幕を閉じる
	6/19	18 諏訪博物館「文明としての御柱祭」講演会
	6/20	「古御柱祭」上社の前の御柱を普通の木に戻す神事
	9/13	諏訪地方各地で小宮
	10/19	下諏訪町御柱実行委員会解散総会120人

の露払いの連や長持の踊り等様々な行事があり、それらの練習が行われる。長持踊りを披露する地元企業の諏訪信金では、一年前から練習を行い「コミュニケーションの機会が増え今まで話したことのない職員とも会話でき結束力が高まる」（信濃新聞2016年6月）という効果を得ている。

観光分野でも、本祭観覧のチケット販売や御柱情報を提供する観光施設の開業、観光客の小宮曳行、物販など、町にとって重要な産業となっている。

多くの神事、準備や練習を経て本祭と小宮が行われるが、これらはすべて奉仕の精神で行うもので、自分のできることを精一杯するという気持ちを地域の人々が共有して成り立つ。地域の子供たちは祭りに関わりながら成長し、町を離れた成人も帰郷して祭りの一員となる。こうした仕組みは「御柱は7年かけ、諏訪地域の人々をまとめる仕掛け」（小山修三氏国立民族学博物館教授2016年6月18日諏訪市博物館主催の「文明としての御柱祭」対談）と言われるように、地域の結束を固くしているといえる。

湖浄連の活動においては、一致団結し結束力が高くなっている行政区を清掃の分担の単位としていること、地域のためになるゴミ拾いを続けることやイベント時の土木工事や印刷などでの協力要請などに奉仕の精神が見られること、などが御柱祭からの影響と考えられる。このように湖浄連の活動は、御柱祭を通して培われた地域の特性の影響を受けていると考えられる。

4. 湖浄連の活動の継続についての考察

本章では、湖浄連の活動が世代交代して継続している理由を考察する。

まずはじめに、一貫して清掃と環境啓発という基本的な活動を継続していることである。長い間には活動が活発化したり反対に解散が検討された時期もあったが、常に地道に忍耐強く清掃と啓発活動を続けている。この基本的活動無くしては、湖浄連の活動はこれほど長くは継続しなかってであろう。市民活動には、新しいことにチャレンジして万が一失敗であったとしても、ゆるぎない基本活動があることが、長期継続にとって重要な要因であると考えられる。

一方では、活動に柔軟性がある。イベントのクリーン祭、講演会等の長く継続しているもののほか、シンポジウムやWSへの参加、諏訪湖で泳ごう、トン汁サービスなど、それぞれの時代の町のイベントや会の盛り上がりから、参加や中止を繰り返している。設立発起人から世代交代する時期に、新しい要素を柔軟に取り入れながら、

あるべき姿を模索している。この試行錯誤の模索期間がなければ、世代交代してまでの継続は無かったであろう。設立40年を間近にした近年は、水質を悪化させるヒシの除去や外来種の駆除などの新しい課題にも取り組んでいる。こうした姿勢がまた次なる世代交代を可能にするものと思われる。

さらに、分担が巧みに考えられていることがある。市や町主催の清掃と湖浄連のみの基本清掃を組み合わせる年間計画を立て、県のアドプト制度とも重層的に組み合わせることで、少ない負担でありながら洩れのない分担になっている。結束力とまとまりのある地域の行政区に基本的な担当として任せていることも特徴である。

さらに、他地域からの視察の受け入れや、全国レベルのシンポジウムやWSへの参加など、常に他者や他地域との交流がある。これらは自らの活動を客観的視点で見直す機会になっており、また他の活動から新しいヒントを得るなどの刺激も受けて、マンネリ化や停滞しそうなことを防いでいる。

また時間的、経済的負担が少ないことがある。自由参加で義務ではなく、地区担当の日のみ、朝8:00～9:00までの一時間行うことでよい。会員費も一団体3000円と少なく、無理のない仕組みになっている。

さらにこれらの要素が良好に働く背景には、物理的にゴミを除去する行為だけではなく、「ゴミを拾う人はゴミを捨てない」「拾っている姿を見せ続ける」のようにゴミ拾いを通して、美しい環境を守る心、地域を大切にすることを育てるという、人づくりへの貢献を行っており、その意義を参加者が共有しているからこそ、活動に参加し協力しているといえる。地域を大切に思う気持ちや、できることを精一杯にという奉仕の精神は、御柱祭という地域の重要な祭りに関わるものが根底にあるものと思われる。

5. おわりに

豊かであった自然が劣悪化し、その環境を回復する市民活動は全国に多くある。湖浄連はトンボの棲息状況の観察から諏訪湖の汚染状態を認識して活動を開始した。ゴミの除去にも効果を発揮してきたが、水質や環境が改善したのは行政による施策による効果が大い。そうした中で、年間の平均参加者3500人のゴミ清掃を37年続けることができた要因には、具体的には、基本的活動の継続と柔軟な対応、巧みな分担計画、他者との交流、少ない負担があった。

しかしその背景には人づくりへの貢献があり、参加者がそれを認めていることが大きい。さらにできることを

できるだけ協力し奉仕する精神も目に見えないながら重要な要素である。特に人づくりへの認識は、環境はあつという間に悪化するが、悪化させるのは人であることを経験していることも大きいと思われる。

こうした活動が良好に行われるのは、御柱祭によって地区住民が一致協力して祭りを成功させる伝統的な暮らしの根底にあることが大きく、湖浄連は、奉仕と協力する精神、人づくりという御柱祭が培ってきたと考えられる要因を、湖の浄化という近代化によって新しく生じた行為へ受け継いだ活動といえるのではないかな。

下諏訪町の環境基本計画書¹¹⁾には、湖浄連を「諏訪湖の浄化を中心とした活動は、下諏訪町の目指す『民公協働のまちづくり』のお手本となっている。」とある。さらに、下諏訪町の国土利用計画書¹²⁾に「町土の町民的経営の推進」がうたわれており、これは、これまで公的な役割を担ってきた国、県、市町村に加え、新たな公共の担い手として地域住民、企業、他地域の住民など多様な主体が、農地や森林の保全活動への参加、緑化活動への寄付など様々な方法により、町土の適切な管理へ参画していくことであり、今後推進していくことが述べられている。全国的に公的セクターのみでは処理しきれない問題を、地域住民を主体とした団体が請け負っていくことが求められて久しい。しかし経済的、人的理由などから大きな広がり、定着には至っていない。下諏訪町は、民公協働、町土の町民的経営等という目標をかかげ、湖浄連はその手本として期待されているが、湖浄連も近年は人的な不足が大きく、存続についての問題は消えていないという。しかし、地域の新しい伝統となってきた官民協働の活動を継続していくことは、全国の同様な問題を掲げる地域や団体へ示唆を与えるものと思われる。市民主体の活動が、公的セクターの役割を担っていくために必要とされる要件について検討していくことは今後の課題であると考ええる。

謝辞：湖浄連代表の小口智徳氏には視察、ヒアリング及び資料収集に多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 伊藤将司, 森本章倫：参加型の社会資本整備事業における継続活動の要因分析に関する研究, 土木学会論文集, vol. 67, pp. 101-108, 2011
- 2) 羽鳥剛史, 片岡由香, 尾崎誠：市民活動の持続可能性に関する心理要因分析, vol. 72, pp. 407-414, 2016
- 3) 井上芳樹, 戸田任重：諏訪湖, 天竜川上流における漂着ゴミ, 環境科学会誌, 16(3), pp. 167-178, 2003
- 4) 久保田稔, 茂吉雅典, 中村義秋：諏訪湖湖面の減少と浸水被害について, 土木史研究, 22号, pp. 61-68, 2002
- 5) 下諏訪町：2011-2020下諏訪町環境基準計画, pp. 19-21, 2011
- 6) 長野県諏訪建設事務所：諏訪湖の水辺整備マスタープラ

ン, 1995

- 7) 長野県建設事務所：諏訪湖治水の歴史, 1998
- 8) 下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会：設立30周年記念誌, 2011
- 9) いい川づくりワークショップ：いい川づくりワークショップ発表資料, E-3, 2012
- 10) いい川づくりワークショップ：いい川づくりワークショップ発表資料, E-1, 2013
- 11) 下諏訪町：2011-2020下諏訪町環境基本計画第2次改訂版, 2012
- 12) 下諏訪町：国土利用計画書第二次下諏訪町計画, pp. 16, 2016